

# 国語 試験問題

二月一日実施

## 注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号

氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

青森県八戸市には、「えんぶり」と呼ばれる、豊作を祈願する伝統的な郷土芸能がある。国の重要無形民俗文化財に指定され、地元では春を呼ぶお祭りとして盛大に行われる。祭りをひと月後に控えたある日、町内会館では町民が三十人ほど集まって役決めが行われ、演目のひとつ「えびす舞」を、「オレ」（太一）と先月転校してきたばかりの「王子」（大路優希）が担当することになった。

うわさ話は速い。特に女子の。  
週明け。

五年一組の教室のとびらを開けるとそこには、クラス一かわいくて、舌足らずの佐藤さんや、クラスで二番目にかわいくて、赤いピンでショートヘアの前髪をとめている鈴木さんなど、女子に包囲されて芸能人の囲み取材のようにになっている王子のすがたがあった。

王子は、えびす舞をやりたいと自ら手をあげたのだと答えているが、佐藤さんや鈴木さんたちの表情や声音から、ただのひとりも納得していないのが見て取れた。

土谷さんと雪田さんは、輪には加わらず、土谷さんはうで組みをして、雪田さんはつくえでほおづえをついて、王子たちをながめている。

豆がスキップでオレのそばに来ると、囲み取材をあげて指した。

「王子のご登場から、もうかれこれ十分はあの状態だぜ」

「マジで？ 王子人気者だな」

「炎上商法ってやつだ。みんなの関心をこれまで以上に買うことに成功したんだ。太一、うらやましいだろ」

モヤッとした。豆め、こっちの気持ちを決めつけるようなことを言うなよ。父さんのやり方で具体的な言葉にすれば、それは「きゆうくつ」だ。

「王子が気の毒だ。オレがビシッとやってやる」

オレは豆の的外れな深読みを肯定せず、話の焦点を王子へもどした。

「お。太一、行け！」

その声援に背中をおされてというか、けしかけられてというか、オレは佐藤さんたちに近づいた。

「あんたたちく、おやめなさいよー」

女子のまねをすると、佐藤さんたちがふりむいた。ふだんのかわいらしさはみじんもなく、七つ組の親方と見まごうほどのいかつい顔をしている。その顔を見たオレは、

「ごめんなさい」

ビシッと頭をさげ、ついてきた豆の後ろに身をひそめた。

鈴木さんが、くっと笑う。佐藤さんが鈴木さんを見て、びみょうな笑みをうかべた。うやむやな空気になって、囲み取材の輪はほどけていく。

「いやあ、安定のお調子者」

豆がほおのニキビをいじりながら、肩かたごしにふりむく。

キャラから外れない限り、安定と安心だ。だが、モヤツとする。やっぱりBそれも「きゅうくつ」だ。

王子がこつちを見た。

でも何も言わなかった。

今日から練習が始まる。

町内会館のえんぶりを練習する部屋は、玄関げんかんを入れて左手の広いフローリング。オレたちは「練習室」とよんでいる。廊下ろうかがまっすぐにおくへのびていて、そこを右に折れるとトイレ。

練習の前にトイレに向かう。練習室からはなればなれるほど、寒くなっていく。屋内なのに息が白い。ドアをおして入ったオレは、う、と小さく声をもらった。

例の、六年生三人組がいた。

彼らと目が合う。

まんなかにいるもじゃ毛が、ニツと歯を見せた。がんじょうそうな八重歯Bがのぞく。背骨にそってツララでなでられた気がした。

もじや毛がジャージのポケットからガムの束を取りだす。一枚引きぬくと、わざわざ紙をむいて差しだしてきた。

「えびす舞、がんばれよ。ほらこれ、やる」

その手は洗ったのだろうか。

オレはかたわらの洗面ボウルをチラッと見る。やつぱり乾かわいている。ということはそのガムを持っている手は洗われていないということ。

引きつりそうになったほつぺたを根性こんじょうで引きあげる。

「ありがとるねーど!」

オレは笑顔のままガムをにぎっている指先を見る。つめの間が黒くよごれている。

見なきやよかったと後悔こうかいがおしよせ、心臓がピリピリとしびれはじめる。

「せっかくやったんだ。今食えよ」

「はいっ」

手を差しだすと、もじや毛の手からガムがうすよごれたタイルのゆかに落ちた。音はしないが、オレの耳はペタリ、としめった音をとらえたような気がした。

「あく、ごめんごめん。落としちゃった。でも三秒以内なら」

もじや毛はガムを拾うよう視線で命令する。

2 みぞおちがギユツとしぼられた気がした。おとなが相手だったら抵抗ていこうするところだが、どういう仕組みか、年が近いほど抵抗できない。

オレは身をかがめてガムにしんちように手をのばす。これからどうしたらいいんだ。だれも助けってくれやしないんだ。自分でなんとかしなきゃ。考える考える。

「さーん、にい」

左側にいたヒヨロリがうれしそうにカウントダウンしてくる。

「なんならオレが拾ってけら」

右側にいた、ネズミが出しゃばって、腰こしを曲げて手をのばした。

と、背後のドアが開いて、オレのしりにぶつかった。

オレは前につんのめり、ネズミに勢いよく頭つきを食くらわして両手をゆかにつく。

ネズミとオレのぜつきようがぶつかり合った。

「いてえ！」

ネズミが頭をおさえる。

「手え！ 手えついちまった！」

オレは両手を高くあげる。

「あ、ごめんさい」

後ろからのおだやかな声にふりむくと、王子だった。

王子は六年生たちを見て、落ちているガムを見る。ふたたび、太夫の三人をじっと見つめた。おこっているでも、笑っているでもない面持ちに、空気がピンとはりつめる。

三人は取ってつけたように「そろそろ行こうぜ。練習におくれる」と言いあうと、手をぬぐうようにオレの肩をたたいて出ていった。

オレははじめられたように、水道に飛びつき、全開にしてワシワシと手を洗う。くっそ。

3

今ごろになってふるえてきた。息があらくなってくる。おく歯がキリキリと鳴っている。盛大に水をはねとぼして顔を洗う。「きれいに使いましょう」と書かれている紙がはられているが知ったことか。バイキンも不運もはねとぼしてしまえ。

顔をあげれば、水滴が散って白くくもっているかがみに、笑顔なのか泣きべそなのか、区別がつかないとっ散らかった表情の自分が、ぼんやりと映っていた。まっかつかだ。キャラの自分なのか、素の自分なのかさえ区別がつかない。

かがみごしに王子と目が合った。ど真顔だ。その表情のままポケットに手を入れたので、オレは警戒する。さらなるガムとかアメとか出して、からかうつもりじゃあるまいな。

が、取りだされたのはハンカチだった。こっちに差しだしてくる。

オレは水がしたたる手をのぼした。胸がジクジクしはじめる。目が熱い。まばたきをすると、まつ毛の水が散った。急にくやしくなって、

「あ、だいじょうぶ。それよごれるべ」

と、のぼした手の行き先をそなえつけのペーパータオルへ切りかえた。ザツザツと引きぬいて顔をざつにぬぐいながら、こっから次、どうしようと考えてる。こういう時、キャラならどうするか。

こうするはずだ。

<sup>D</sup> 自分のまっかな顔を指した。

「見る、サルのしりみみたいだべ！」

「……」

王子、ぜんぜん笑ってくれない。よけいへこむわ。

「あのもじやもじやの毛、むしってやろうか」

そう強がってみたが、六年生とのやりとりも、かみしめすぎてあごのつけ根が異常に重だるくなっていることも、必死にならなければならないようにしている自分自身も情けなかった。

体の中にたまりにたまったヘドロのようなものをはきだすように、<sup>4</sup> 大きなため息をつく。

王子にビシッと敬礼した。

「つきとばしてくれてありがとるねーど！」

王子はニコリともせずガムを拾って、洗面台横のゴミ箱にすてる。

「どういたしまして」

(高森美由紀『ふたりのえびす』による)

1. ~~~~~線部A「それは『きゅうくつ』だ」・~~~~~線部B「それも、『きゅうくつ』だ」について、説明したものと最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア Aの「きゅうくつ」とBの「きゅうくつ」は、いずれも豆への思いである。

イ Aの「きゅうくつ」とBの「きゅうくつ」は、いずれも太一自身への思いである。

ウ Aの「きゅうくつ」は豆への思いであり、Bの「きゅうくつ」は太一自身への思いである。

エ Aの「きゅうくつ」は太一自身への思いであり、Bの「きゅうくつ」は豆への思いである。

2. ———線部1「豆の的外れな深読み」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア クラスでとくにかわいい佐藤さんや鈴木さんにチャホヤされる王子を、太一がうらやましく思っているということ。

イ みんなから囲まれているもののだれからも歓迎されていない王子を、太一がかわいそうだと思っているということ。

ウ 引ひつこ込み思案しわんなはずなのにえびす舞をやりたいと手をあげた王子と、太一が張り合っていると思っているということ。

エ どんな理由であってもみんなの視線を集めることができている王子と、太一がかわりたいと思っているということ。

3. ———線部2に「みぞおちがギュッとしばられた気がした」とありますが、このときの太一の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 本当はもじや毛と仲良くしたいのに、自分の気持ちを伝えることができず仲良くなれないことにとまどっている。

イ 本当はもじや毛の提案を明るく断りたいのに、どうせ言っても聞いてくれないと思ひ、別の方法を考えている。

ウ 本当はもじや毛の命令に逆らいたいののに、どうしても逆らうことができない状況じょうきょうに苦痛を感じている。

エ 本当はもじや毛のガムは食べたくないのに、誰だれの助けもなく従したがうしかないことに不満を感じている。

4. ———線部3に「今ごろになってふるえてきた」とありますが、このときの太一の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 王子が登場したおかげで助かったものの、助けがなくてもピンチは脱だつすることができたと言っている。

イ 王子が登場したおかげでピンチから脱することができ、安心すると同時に緊張きんちようから解放されている。

ウ 王子が登場したおかげで助かったものの、ピンチを招いた自分の運の悪さに対して腹立たしく思っている。

エ 王子が登場したおかげで、ピンチをもじゃ毛たちと仲良くなるチャンスにできなかったとがっかりしている。

5. ———線部4に「大きなため息をつく」とありますが、このときの太一の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア もじゃ毛たちに思いがけず出会ってしまったことや、王子にかっこわるいところを見られてしまったことを自分の運の悪さが招いたことだとあきらめて、気持ちを切りかえようとしている。

イ もじゃ毛たちにいじわるをされて不快に感じ、さらに王子に助けってもらったことになった自分をふがいなく思いつつも、気持ちを落ち着かせて、気持ちを切りかえようとしている。

ウ もじゃ毛たちからのいじわるを自分でなんとかしようと思っていたのに、余計なことをして自分を助けた王子に対するいかりをおさえて、気持ちを切りかえようとしている。

エ もじゃ毛たちからのいじわるをどうにもできなかった自分、その状況をいともたやすく解決してしまった王子にかなわないことを悟さとって、気持ちを切りかえようとしている。

6. ~~~~~線部C「ありがとるねーど！」や~~~~~線部D「見ろ、サルの上りみたいだべ！」のような発言を太一がしたのはなぜですか。本文の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

7. 文章の表現の特徴として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 三人組が立ち去ったあとの場面では、太一の心の声が短い言葉でたたみかけるように表現されることによって、こみ上げる悔しさや動揺を読者がイメージしやすくなっている。

イ 教室での場面では、多くの人物を登場させることによって、本当は太一が孤独を感じているということを読者が読み取りやすくなっている。

ウ 文章全体において、「ビシツと」や「ピリピリと」、「モヤツと」といった体の動きを示す表現を用いることによって、登場人物の気持ちを読者がイメージしやすくなっている。

エ 文章全体において、太一が自問自答する形で物語が進むことによって、太一が自分の考えを整理しながら問題を解決している様子を読者が読み取りやすくなっている。

8. 登場人物の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 太一は周りの人に対して気を遣いすぎて、本音ではなく、冗談交じりにしか発言できない不器用な性格である。

イ 豆は物事をかたよって見るところがあり、王子に対しては皮肉まじりの言動が多く冷ややかな目で見ている。

ウ 王子は周りの人や状況に流されることなく自分の考えを伝えることができ、冷静に行動することもできる。

エ もじや毛はおつちよこちよいであり、自分では悪気はないものの、周りから乱暴な人物だと恐れられている。

## 二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

店の経営者にインタビュアがマイクを向ければ、「少しでもお客様の笑顔が見られるようにと考えて、新メニューを開発しました」と語るだろう。しかし、笑顔が見たいのなら、無料で提供すれば、もっと大勢の笑顔に出会えるはずだ。

小さな情報を拾って広く報じることが一般的になったおかげで、このような「綺麗事」が大衆に浸透し、今では小さな子供までが、政治家のような気の利いた（つまり大人に忖度した）物言いをするようになった。その場で発するに相応しい言葉は、挨拶のようにみんなが笑顔になれるものであり、人情や友情や愛に満たされている。しかし、それは明らかに本音ではない。ただ、「儲けたいだけです」という本心はあまりにもストレートだから、嫌われている。子供も、「良い子でいれば褒められて、自分の利になる」と計算している。

それが、ネット社会に顕著に現れている。実社会でもそうだが、ネットはさらに「言葉」が前面に出て、綺麗事の応酬になる。そういった場で自分の夢を語り、みんなから「いいね！」をもらって満足していると、そのうち、その段階から進まなくなるか、それ自体がストレスになるかのどちらかだろう。前者の方が多い。だいたい七割くらいか、というのが僕の観察結果だ。ストレスになる三割は、ネットから離れていき、本来の夢を再確認するので、こちらの方が「好転」と見ることがができる。

一五年ほどまえのネットは、そうではなかった。多くの人が夢をそこで育てることができた。しかし、それを見た大勢がネットに参入し、実社会と同じか、それ以下になってしまった。一五年くらいまえがターニングポイントであり、スマホが登場したり、SNSが広く一般化した時期と一致している。

僕自身は、ネットをかれこれ三〇年ほど体験してきたが、やはり前半の一五年で多大な恩恵を受けた。そして、後半の五年は、ほぼ沈黙することに決めて、今に至っている。沈黙しているのは、メリットよりデメリットが大きすぎる、という判断であり、「ネットを諦めた」と表現しても良いだろう。

ただ、別の見方もできる。このSNSというのは、夢のごく初期段階でも、夢が叶う疑似体験ができる。いわば、ヴァーチャル・リアリティの一種と考えることができるだろう。

ちよつとした作品を発表するだけで、芸術家になった気分が味わえるし、小説を小出しに発表して、読者の反応の手応えを体験できる。けつして悪くない。平和な環境である。

ただ、問題は、それは芸術家や小説家のほんの一部でしかないし、もしかしたら、全然別物かもしれない。少なくとも解像度が落ち、実質的な充実を味わうことにはならない。それでも、これで満足できるのなら、けっこうなことである。ゲームを楽しんでいる人に、「そんなものは現実じゃないぞ」と文句をつけるのと同じで、言うだけ野暮やぼというものだ。

現代社会というのは、このように、広く多くのものが手軽に楽しめるように作られ、大衆の前に「どれでもすぐに楽しめます。どうぞお手に取って、確かめてみて下さい」と並んでいる。店へ行く必要もなく、個人の目の前にまで押し寄せてくるから、つい手を出したくなるのも当然である。

かつては、本当にマイナで一部の専門店でしか手に入らなかったものも、個人の趣味を察知して、むこうから近づいてくる時代である。まさに、「据え膳すえぜんの社会」といえる様相ではないか。

「田舎暮らし」だって、今では立派な商品となつて、絶賛好評売出し中である。「人々の夢をサポートする」と謳うたわれているが、もちろん、それは綺麗事であり、商機があると踏んでいいるからプロデュースされる。

\*メジャなものではしか商売になりにくかった時代から、マイナ志向にシフトしたのは、社会が全体的に豊かになり、メジャなものが行き渡ってしまったからだ。よりマイナで、人々の欲求に深く入り込むようなアプローチが必要になった。

手軽で便利で、しかもかつてよりも安価になつている。情報、生産、流通に金がかからなくなったことが大きいだろう。社会自体、経済のシステム自体が合理化された結果といえる。

では、こんな素晴らしい状況になつて抜け落ちたもの、失われたもの、忘れてしまいがちなものは、何だろうか？ それは、個人の「自分なり」のスタイルである。

いくらマイナ志向になつても、商品や製品は、ある程度の共通化と単純化が必要なのだ。アナログをデジタルにするように、各種取り揃えていても各段階のギャップの間には隙間があつて、そこが埋められない。四捨五入によつて、細かい桁けたがどうしても捨て去られる。

そこは、各自で補つてほしい、というのが建前なのだが、残念ながら、大衆はそのデジタルの解像度に慣らされてしまう。自分なりのスタイルを、既存のものに合わせてしまう。

ユニクロへ行けば、沢山のカラーのシャツが選べるだろう。クレヨンも色鉛筆も色数を誇つて箱に並んでいる。そういうものに慣れ親しむと、色を混ぜ合わせて、自分の色を作る作業を忘れてしまう。そんな発想さえしなくなる。その間に存在するものは、もともとないものになるのだ。

結果として、「自分なり」のものが、消えているのである。親切にも世の中は、「その色はありません。諦めるしかあり

ません」とあなたに教えてくれる。

なんか少し違うような気がするけれど、まあいいか、と諦める癖がつく。色を「選ぶ」ことに比べて、色を「作る」ことは、格段に面倒で、時間もお金もかかるうえに失敗も多い。だから、誰も作らなくなり、選ぶだけになる。

ここで本当に失われているのは、その色を作るために必要だった人間の「感覚」である。見極めること、違うと判別すること。そして、何が不足しているのか、どうすれば「自分」が思ったものに近づくのか、と考える力である。

誰も「諦めた」わけではないが、知らないうちに、自然に「諦め」させられているのである。

多くの人は、それで満足している。ときどき、少し違うかな、と首を傾げる程度だろう。しかし、だんだんその違いが蓄積する。違っていたときに生じた不満も少しずつ溜まるだろう。

そんなときに、「自分なり」の自由を持つている人に出会くと、「あれ、そんな色があったの？」と驚くことになるかもしれない。そういった機会でもなければ、気づかなかったものだ。ただ、それはその人の色であって、「その色はどこで買ったの?」「その色はどうやって作るの?」と尋ねても、意味はない。自分の色ではないからだ。それが、ずばり気に入った色だ、と思いがちだが、それでは、ショーケースに並んだ色見本が一つ増えただけにすぎない。

では、結論を書こう。つまり、そのように自分の色を、並んでいるものの中から探し出すことを諦めれば、結果として、自分の色を見つけることにつながる。どこにもなければ、作るしかないからだ。

また、その色を作り出すプロセスを、毎日SNSで報告し、「この色はどうでしょう?」と他者に問いかけたりしないことである。自分で判断する目を育てることが、色を作る能力の本質だからである。

新しいものを得るためには、なにかを諦める必要がある。その新しいものは、あなたの心の中にずっと、子供の頃から眠っていたものである。まずは、それを思い出し、心の中から取り出して、このリアルの世界で具体化する、それが「作る」という行為なのだ。

(森博嗣『諦めの価値』による)

\*付度…他人の心中を押し量ること。

\*擬似…本物に似ていて区別がつきにくいこと。

\*マイナ…「マイナー」のこと。あまり知られていないさま。有名でないさま。

\*メジャ…「メジャー」のこと。よく知られているさま。有名なさま。

1. ———線部1に「『言葉』」とありますが、ここでの「言葉」を説明した部分を十四字で抜き出しなさい。
2. ———線部2に「このSNSというのは、夢のごく初期段階でも、夢が叶う擬似体験ができる」とありますが、筆者が「SNS」を通じた体験を「擬似」というのはなぜですか。「一方で」という言葉を必ず用い、本文の具体例に則して、六十字以内で説明しなさい。
3. ———線部3に「『据え膳の社会』といえる様相ではないか」とありますが、現代社会が「据え膳の社会」となったのはなぜですか。三十一字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。
4. ———線部4「自分の色」とはどのようなものですか。十四字で抜き出しなさい。
5. ———線部5「誰も作らなくなり、選ぶだけになる」について、次の(1)・(2)に答えなさい。
  - (1) 「色」を「誰も作らなくなり、選ぶだけになる」理由としてあてはまらないものを一つ選び、符号で答えなさい。
    - ア 多くの「色」が初めから目の前に与えられているから。
    - イ 作った「色」を周りの人から否定されることがこわいから。
    - ウ 「色」を作ることとはものすごく労力が必要なことから。
    - エ 少しの「色」の違いならば諦めるくせがついてしまうから。
  - (2) 「色を作る」ために筆者はどのようなことが必要だと考えていますか。十四字で抜き出しなさい。
6. 本文の内容としてあてはまるものには○、そうでないものには×と答えなさい。
  - ア インターネット特有の、目に見えない他者からの応援は、いつの時代も自分の夢の前に進める原動力となる。
  - イ 世の中が豊かになるにつれて「田舎暮らし」を必要とする人が増えたため、「田舎暮らし」が商品となっている。
  - ウ 昔の子どもたちは、今の子どもたちに比べて本音で話をすることが多かった。
  - エ 心の底から満足できる「自分の色」は、ショーケースに並んでいる既存の色の中にあるとは限らない。
  - オ 「作る」という行為には、今の自分の価値観をすべて壊すことが求められる。

7. 次の会話文はこの文章を読んだ生徒A～Dの感想である。筆者の考えに最も近い生徒を選びなさい。

生徒A 「ユニクロに行く去何でもそろそろから便利でいいよね。種類も豊富だし、たくさんのカラーの中から選ぶことができるから、私はまず服がほしくなったらユニクロに行くことにしているんだ。」

生徒B 「わかる。今ユニクロは洋服だけでなく、かばんやくつなども売っているよね。他の人ときそいのつもりで行ってもつい買っちゃうんだよね。本当に価値があると思うものだけを買うようにしないとね。」

生徒C 「僕も似たようなことがあった。値段も安いから少しデザインのイメージが違っても、まあいいかなと思って買っちゃって失敗した。本当に自分がほしいものをもっとじっくりと考えればよかったよ。」

生徒D 「私も同じ。買ったあとに他の人が別の色の同じ洋服を着ているのを見て、そっちの方がよかったと思って後悔するんだ。もっといろいろネットで調べてから買えばよかったよ。」

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 町の復興が進む。
- ② 丁寧な口調で話す。
- ③ そうは問屋がおろさない。
- ④ 冷ややかに見つめる。
- ⑤ コップにお茶を注ぐ。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 記念誌がカンコウされる。
- ② 飛行機をソウジュウする。
- ③ 身体ケンサを行う。
- ④ セーターをアむ。
- ⑤ ヤサしい問題を解く。

余白

余白